

## 2. イサクの供犠

人々は今日でも「主の山に、備えあり（イエラエ）」と言っている。

— 創世記 22 : 14b

戦時中だったわたしの子供時代、教会はどこも閑古鳥が鳴いていた。戦争末期になると、壮年は40歳でも軍隊に召集され、礼拝に集うものはほとんどが老人や婦人、子供たちだった。思想犯を取り締まる特別高等警察官（特高と言われて、その名を聞くだけで身震いするような印象を子供心にも抱いていた）が礼拝に出席、発言を封じることもあったようだ。わたし自身は直接、目撃したことはないが、「何々教会の牧師がスパイ容疑で捕まった」という風評に怯えたことは覚えている。事実、キリスト教諸教派が国の政策を受けて合同、日本基督教団が成立した翌年の1942年から43年にかけて百数十名に及ぶホーリネス系の牧師たちが天皇を至上と仰ぐ国体に反するという罪状で検挙、厳しい取り調べを受け拷問を加えられて獄死した人もいる。国策に応じ戦争協力に走った当時の教会指導者の多くは国家に迎合して、彼らを非難し指弾する立場に回った。戦後、日本基督教団は謝罪を表明したが、そのような信仰上の危機的な状況や事情が一般のキリスト者にどのように伝えられ受け止められていたのか、実情を知ることもないままに、わたしは「<sup>じんちゅうほうこく</sup>尽忠報国」の言葉に踊らされ、軍人となって国に尽くすことだけを考えていた。非国民という汚名から逃れたいという気持ちも潜んでいた。

しかし、それでも教会はわが家に等しく、教会員の子供たちは兄弟同然で、教会のバルコニーから一緒に礼拝を見学したり、外庭で鬼ごっこやビー玉遊びなどをして屈託がなかった。イースターやクリスマスなどもそれなりに賑やかで、日曜学校では劇なども演じた。後年、当時の神学生で劇を指導したN牧師から「君は確か、良きサマリア人の劇で強盗役だったね」と言われたことがある。クリスマス・プレゼントも物資が欠乏し、教会を支える人々も少ない割には豪華だった。中でも忘れられないのは「聖書いろはカルタ」で、今でもカルタの文句を幾つも思い出す。その中でも「す」と言えば「素直に上る壇の上」という手札の文句や絵札の画面が目には浮ぶ。創世記22章の「イサクの供犠」の場面である。

どのような気持ちで、そのカルタを手にとっていたのか記憶は定かではないが、軍人になって戦地に赴き天皇と国に尽くすということが決して遠い将来への夢物語などではなく<sup>たんせき</sup>旦夕に迫っていたはずにもかかわらず、空想と現実の間で一種の観念にとどまっていたことにも似て、「自分がイサクだったら」と考えて肅然とするような気持ちを半ば抱きながらも、それは未だ物語の世界での出来事だった。

「素直に」とか「自己犠牲」「無私」ということは昔も今も、キリスト者の徳目として強調される。

徳目がどれだけ満たされているか否かで信仰の有無や濃淡が語られることも少なくない。しかし、モリヤの地でイサクの供犠物語を「聖書いろはカルタ」が述べるような彼の素直さ、あるいは父親であるアブラハムの主なる神への絶対服従を示す一種の信仰美談の類として受け止めて良いのか、わたしはイサクのように振る舞えるのか、自分を犠牲として素直に神に献げて悔いない信仰と勇気が本当にあるのか。戦後になって、わたしは「自己犠牲」とか「素直に」ということが歎嘆でしかないと思う一時期を過ごした。戦前、「滅私奉公」や「忠君愛国」「絶対服従」ということが美德として喧伝され、それに背くことは非国民として厳しく糾弾された。天皇を神とする「疑似宗教国家」への忠誠が美德として讃えられた戦前の反省や批判に端を発し、「宗教的な装い」や「宗教的な要求」に対する疑問だけでなく、嫌悪感をさえ募らせていた。青年期に差し掛かった自己への目覚めが戦後民主主義の急速な台頭と共に、主体性や自己の確立という主張の背後で自己中心性を醸成して行った面もあったと思う。「イサクの供犠」を、それこそ「素直に」肯定することはできなかつたし、信仰美談にはならないと思う時期が少なからずあった。後者については今もその思いは強い。

創世記22章の「イサクの供犠」物語の主人公は正確に言えばアブラハムである。イサク物語は24章から始まる。モリヤの地でイサクを「焼き尽くす献げ物（口語訳では「燔祭」）として捧げなさい」と神に命じられたアブラハムの心中はいかばかりだったことか。主なる神の約束にもかかわらず年老いても嗣子がないアブラハムの迷妄を破って与えられた愛児だった。神の約束の確かさに驚喜し、それこそ「目に入れても痛くない」思いで慈しみ育ててきたそのわが子を燔祭として捧げよという神の言葉は、余りにも過酷であり、無情に聞こえたに違いないが、聖書はアブラハムの心境などは全く語っていない。彼はわが子に薪を背負わせて黙々と道を急ぐ。「燔祭の小羊は何処にいるのですか」と尋ねるわが子にアブラハムは「きっと神が備えてくださる」と語っているが、祭壇の上に薪を並べ、イサクを縛って薪の上に載せたアブラハム、そして祭壇の薪の上に縛られて座らされたイサクの胸中を誰か推し量ることができるだろうか。しかし、アブラハムが刃物をかざしてイサクを屠ろうとしたまさにその瞬間、天からの声がアブラハムの手を留める。「その子に手を下すな。何もしてはならない。あなたは神を畏れるものであることが、今、分かったからだ。あなたは、自分の独り子である息子すら、わたしに捧げることを惜しまなかつた。」

そして、イサクの代わりに、角を木の茂みに絡まれて動けない雄羊が献げられた。アブラハムがその場所をヤーウェ・イルエと名付けたことから、人々は今日でも「主の山に、備えあり（イエラエ）と言っている」と聖書は伝えている。

口語訳聖書では「アドナイ・エレ」と訳されているが、子供のころ馴染んだ文語訳は「エホバ・エレ」である。この聖句を引用して、行き詰まり切羽詰まった時に必死で祈ったら思いもかけない形で神が応えてくださったという証は多く聴かれる。わたしはそれらの証を疑ったり否定するつもりは全くない。いかなる苦しみや懐疑に捉われ行き詰ろうが、主なる神が道を備え、万事を益としてくださると信じていることができる人は幸いである。

しかし、信仰深く熱心に祈ったから、主が備えてくださったのか。前段に記した22章12節の言葉は、神がアブラハムを試し、わが子を犠牲にしても神の言葉に聞き従う信仰があったから代わりの羊を備えてくださったと受け止められやすいが、果たしてそうだろうか。

信仰は神との取引ではないはずだ。「契約概念」は新・旧約を通して聖書の主要な神学要素だが、それは対等の立場ではなく、神の一方的な恵みの支配という前提のもとでのみ成り立つ。わが子の供犠に対してアブラハムが終始、沈黙を守り、イサクもまた「素直に」祭壇に上ったと描かれているその場面がわたしたちに語りかけているのは、アブラハムの信仰深さやイサクの素直さではなく、天地万物の創造主、恵みをもってこれを支配しておられる神の主権とその中に込められた絶大な愛と恵み以外の何物でもないはずだ。12節の御言葉は、そのままヨハネ3:16の聖句をわたしたちに思い起こさせる。聖書は終始、神とその絶大な愛を語り証しているのである。Iコリント13章の「愛の賛歌」はよく知られているが、「山を移すほどの完全な信仰を持っていても愛がなければ、無に等しい」というその「愛」は神の本質であり、神から出たものなのである（Iヨハネ4:10参照）。その計り知ることでもできない神の愛に包まれた世界に息づくときにはじめて、わたしたちのうちに無償の愛や献身の日々が始まる。もはや（わたしの）信仰の濃淡や犠牲の大小を問うこともないはずだ。比較対照の世界から自由にされる。アブラハムの信仰もイサクの素直さも「イエラエ」の告白も神の絶大な愛を映し出すものであり、主なる神とその絶大な愛への応答としてのみ理解され得るのではないか。

神学校に進む前に、わたし自身がそのことをどれだけ理解していたか。正直なところ余り思い出せない。むしろ、わたしは神学校に入ってから、「献身」とか「信仰の有無」やその「濃淡」を問う声にいささか辟易しながら、到底ふさわしくない自分に自分で愛想を尽かし退学を決意したこともあった。イサクのように「素直」に献身者の道を歩むことは、それこそ神をも人をも欺くことだと考えた。宗教の衣を纏うことには到底耐えられないという思いもあった。しかし、「素直」であることや信仰的行為そのものが、わたしの側の一種の徳目として数えられる性質のものではなく、神の一方的な主権と恵みの中でのみ意味を持つこと、わたしの側には「何もない」ことが多少なりとも判り始めたことが、わたしを辛うじて神学校に留まらせた。それから60年余、迷いが全くなかったかと言えば嘘になる。しかし、「ヤーウェ・イルエ」の確かさが、わたしを今日あらしめていることは確かである。感謝の外はない。